

那覇市文化財調査報告書第56集

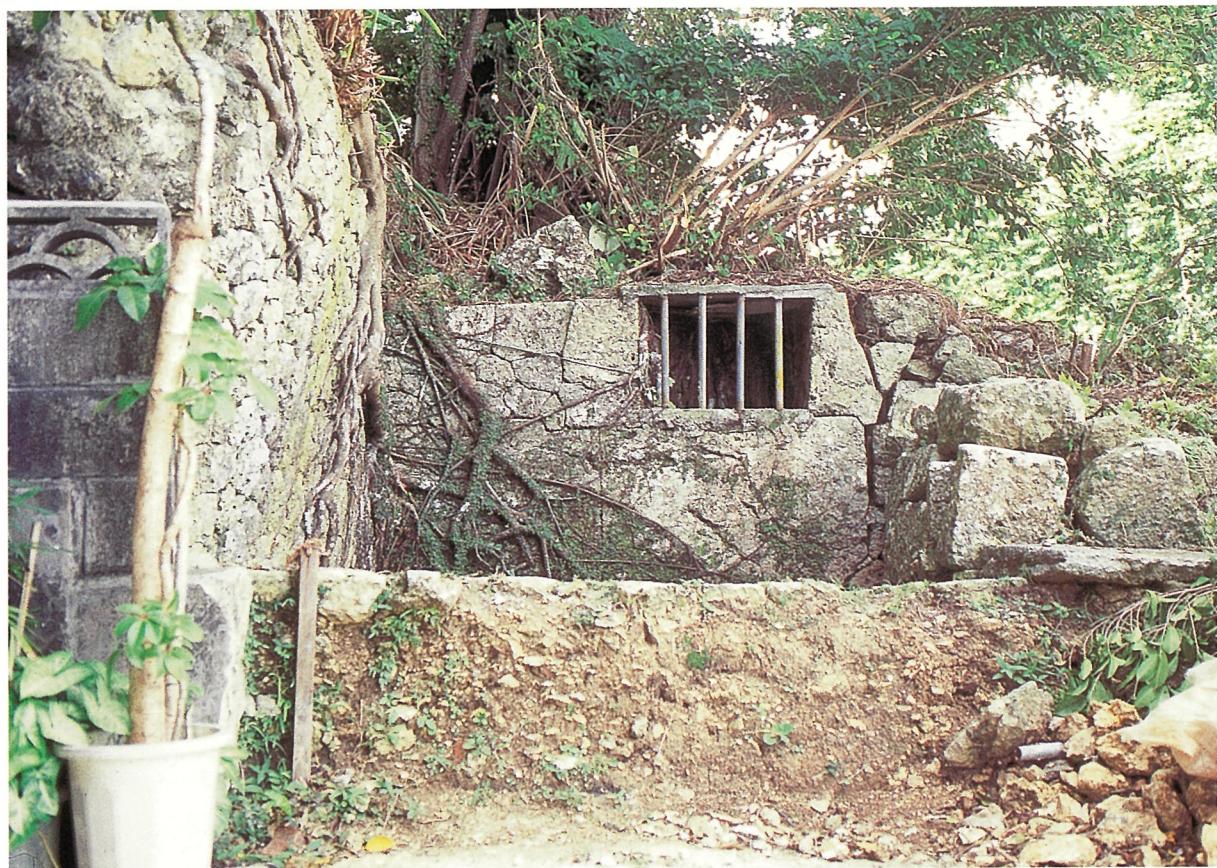
# 首里旧山川村跡

(池城殿内地点)

— 県道28号線道路工事に係る緊急発掘調査報告 —

2002年11月

那覇市教育委員会



上：池城殿内の井戸（正面）

下：発掘調査状況と層序

## 序

この報告書は、沖縄県南部土木事務所の県道28号線道路工事に係る埋蔵文化財「旧山川村跡－池城殿内地点－」の緊急発掘調査の成果を記録したものです。

発掘調査は2000年8月11日から19日の僅か6日間の短い調査でしたが、それでも多くの成果が得られました。

特に、池城殿内所在の井戸の土木工事の過程や琉球王府時代の生活層との関連が確認されたことは注目されるものと考えられます。

その他に、本遺跡で使用された中国産陶磁器・日本産陶器・沖縄産陶器等の貴重な資料が発見されました。

沖縄県南部土木事務所を始め関係各位におきましては、発掘調査から資料整理・報告書作成に至るまで、多大なご協力を頂き深く感謝申し上げます。

末尾になりましたが、本報告書が「旧山川村跡－池城殿内－」の理解と、広く埋蔵文化財に対する認識と理解を深める資料として活用されることを願います。

那覇市教育委員会  
教育長 **仲田 美加子**

## 例　　言

1. 本報告書は、平成12年度に実施した「首里旧山川村跡－池城殿内地点－」の発掘調査の成果をまとめたものである。
2. 調査は「県道28号線道路工事」に係るもので、沖縄県南部土木事務所の委託を受けて那覇市教育委員会が実施したものである。
3. 発掘調査については、玉井建設のご協力を頂いた。記して謝意を申し上げます。
4. 元那覇市文化財保護審議調査会　会長真栄平房敬氏の昭和63年度の文化財調査報告「池城殿内の井戸について」を第Ⅰ章に掲載した。記して謝意を申し上げます。
5. シカの角については、沖縄県立埋蔵文化財センター調査課　課長盛本勲氏よりご助言を頂いた。記して感謝を申し上げます。
6. 出土遺物の資料整理は下記のメンバーで行った。  
宮良文子・伊波かおり・大城陽子・比嘉君子・杉村千重美
7. 写真撮影、現像、焼付等は、伊波小百合氏・仲地和美氏の協力を得た。記して感謝する。
8. 本報告書の執筆は、第Ⅱ章を市教文化財課文化財係　主幹兼係長古塚達朗による。その他の執筆・編集は島が行った。
9. 本報告書に記載した国土基本図は国土地理院発行のものを複製した。
10. その他の発掘調査で得られた資料は、那覇市教育委員会文化財課で保管している。

## 報告書抄録

ふりがな	しゅりきゅうやまかわむらあと (いけぐすくどうんちてん)						
書名	首里旧山川村跡 (池城殿内地点)						
副書名	県道28号線道路工事に係る緊急発掘調査報告						
卷次							
シリーズ名	那覇市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第56集						
編著者名	真栄平房敬・古塚達朗・島 弘						
編集機関	那覇市教育委員会文化財課						
所在地	〒900-8553 沖縄 都道府県 那覇市樋川2-8-8 TEL 098-853-5776						
発行年月日	西暦 2002年 11月 29日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村	北緯 。 。 。 。 。 。 。	東經 。 。 。 。 。 。 。	調査期間 2000 08 11 ～ 2000 08 19	調査面積 16m <sup>2</sup>	調査原因 事業に伴う緊急発掘調査
しゅりきゅうやまかわむらあと 首里旧山川村跡	おきなわけんなはし 沖縄県那覇市 しゅりやかまわ 首里山川	47201	127度 42分 54秒	26度 13分 01秒			
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	備考		
首里旧山川村跡	屋敷跡	16世紀 ～17世紀	ピット群 石敷遺構	外国産陶磁器 青銅製品 錢貨等			

# 目 次

## 序

### 例言

### 報告書抄録

第Ⅰ章 池城殿内の井戸	1
第Ⅱ章 池城殿内について	3
第Ⅲ章 調査の概要	5
A. 調査に至る経緯と経過	5
B. 調査の内容	9
1:層序	
2:遺構	
3:出土遺物	
第Ⅳ章 まとめ	20

## 挿 図 目 次

第1図 首里旧山川村跡—池城殿内—の位置	
第2図 首里古地図	2
第3図 調査地区と層序ライン	6
第4図 各ライン層序	7
第5図 南地点ピット平面図と断面図	8
第6図 白磁:皿・杯、青磁:碗	14
第7図 青磁:皿・壺、青花:皿・碗	15
翡翠釉:皿、型物(不明):杯	
第8図 褐釉陶器:摺鉢、備前陶器:摺鉢	16
沖縄産陶器:壺・水鉢・円盤状製品	
第9図 錢貨、青銅製品、鉄釘、鉄滓?	17
第10図 高麗系瓦:平瓦	18
明朝系瓦(灰色):丸瓦・平瓦	
明朝系瓦(赤色):丸瓦・平瓦	
第11図 ヤコウガイの蓋、ウマの寛骨、シカの角	19

## 表 目 次

第1表 遺物出土一覧	5
第2表 遺物観察一覧	13

## 図 版 目 次

図版1	上:遺跡の遠景 中:池城殿内の井戸正面 下:池城殿内の井戸の石垣
図版2	上:調査区 中:調査風景 下:池城殿内井戸の層序
図版3	上:南地点層序 中:南地点遺構状況 下:シカの角出土状況
図版4	上:石敷遺構 中:石敷遺構半裁状況 下:南地点の完堀状況
図版5	白磁:皿・杯、青磁:碗
図版6	青磁:皿・壺、青花:皿・碗 翡翠釉:皿、型物(不明):杯
図版7	褐釉陶器:摺鉢、備前陶器:摺鉢 沖縄産陶器:壺・水鉢・円盤状製品
図版8	錢貨、青銅製品、鉄釘、鉄滓?
図版9	高麗系瓦:平瓦 明朝系瓦(灰色):丸瓦・平瓦 明朝系瓦(赤色):丸瓦・平瓦
図版10	ヤコウガイの蓋、ウマの寛骨、シカの角



第1図 首里旧山川村跡—池城殿内—の位置

# 第Ⅰ章 池城殿内の井戸

所 在 地 首里山川町1丁目22番地

調査年月日 1988年12月12日

首里台地の西北端部に位置し、16世紀中葉に地下の固い岩盤を掘り抜いてつくられた深い井戸である。

この井戸は池城家の屋敷の南西隅（副門の内側右手）に細長の瓢箪（ひょうたん）形に掘り下げてつくられている。井戸口は狭いが（長径約90cm短径約68cmの楕円形）底に向かって下降拡大しながら地下水の流れに達するまで掘り下げてある。

地表から岩盤に至るまでの内部の壁は沖縄独特の「あいかた積み」の緻密な石積みで固めてある。井戸端（水汲み広場）は約250cm×212cmの長方形で屋敷の建つ地盤より約2mほど掘り下げてつくられ、緻密に石敷きされ、北西隅に排水用の小暗渠が設けられている。広場に下る浅い勾配の石畳道は幅約225cmで数段に分かれていたが現在その大半が破壊されている。

普通一般の井戸は井戸端の水平線とほぼ同じ高さのところで井戸口を円形に石組みして固めてある。そして場所によっては更に井戸口の三方（後と両側）を石垣で囲んである。

ところが、この井戸は井戸端を深く掘り下げて設けてあるので、井戸端に接する井戸口の一部片方が井戸端の水平のところまで垂直に切り取られた恰好になっている。そのため井戸口を固める石組みは楕円形の井戸口を二つに分け、約140cmほどの段差をつけて二段に仕上げてある。そして井戸口と井戸端との境には縦約85cm、横124cm、厚さ15cmほどの一枚の石板を固定し、安全に水汲みができるように考慮されている。

地盤の高いところに残された片方の井戸口の左右には高さ5~60cmほどの石を置き、その上に太い角材を渡して固定し、それに滑車を取り付けて水汲みするようになっている。

池城家の娘に当たる古老の話によれば、この井戸は御家創立当初からの井戸であるという。地域の古老の話によれば、井戸の深さは15尋（約23m）以上もあるという。そして井戸の西方の斜面にあ

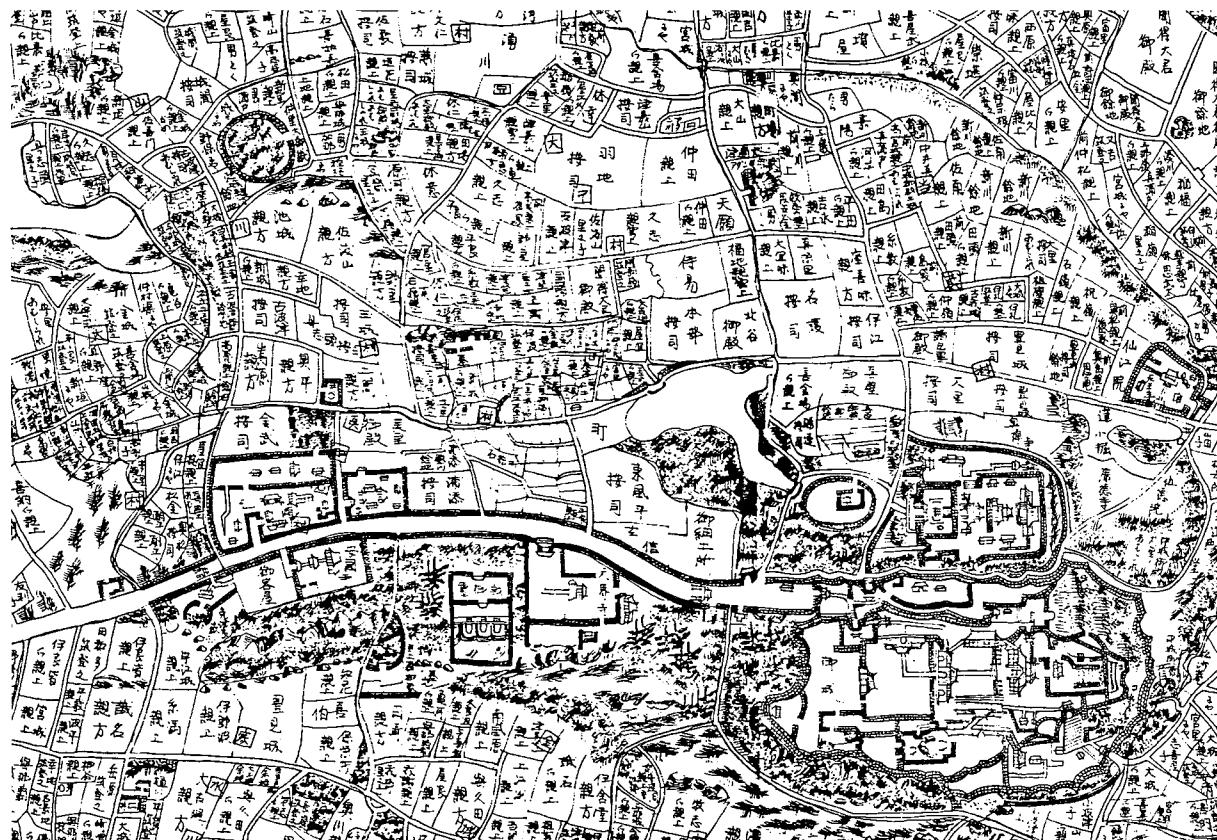
る山川樋川（豊富な水量で有名。沖縄戦で破壊埋没）と同一水源である。そのため井戸の底は絶えず  
泉水が流れ、どんな干ばつ時でも涸れたことがないという。又、山川樋川の泉水の流れ出ていた自然  
洞はこの井戸の底につながっていたという。

池城家は16世紀の中葉に王位争いで勝利した尚元王側にたった三司官大新城親方安基を元祖とし、  
一家から七名の三司官を出した名門である。そしてその屋敷は首里古地図（17世紀）にも記され、先  
祖代々うけつがれて現在に至っている。

この井戸も権力と金力を兼ね備えた者でなければできないような難工事の跡があり、井戸全体の  
石組みもすぐれ、とりわけ井戸の内壁の下降拡大した石積みは高度の技術を要するものである。井戸  
全体の姿も整っており、水と生活の文化を伝える貴重な文化遺産であるばかりでなく、今尚池城家を  
宗家とする毛氏一族（現在約一千世帯余り）の信仰の対象ともなっている。

現在、井戸口は危険防止のため鉄格子を取り付けてある。

（真栄平房敬）



第2図 首里古地図

## 第Ⅱ章 池城殿内について

まずは、那霸市首里に伝わる民話を紹介したい。

国王が亡くなり、いよいよ新しい国王をたてなければならなくなつた。しかし、世子は、チーグー（言葉が話せない）との風評があり、すんなりと王位に就くことができなかつた。すなわち、津堅親方たちは、そのことを理由に、世子の弟に当たる王子を押し立て、やがては利権を我がものにしようとしたのであった。

大新城親方は、世子が幼いころから側に仕え、確かに口数は少なくとも、世子が利発な人格であることを知っていた。とはいえ、いかんせん口数が余りにも少ないため、津堅親方たちの言い分に傾く者たちが多数を占めようとしていた。そのため、大新城親方は、「一言でも皆の前で、世子が言葉を発して下されば・・・」と悩んでいた。

さて、首里城に重臣達が集まり、次期国王を決める大切な会議がはじめられた。当然、世子が後を継ぐべきだと、大新城親方は訴えた。しかし、直ぐ様津堅親方は、「チーグーでは国王に相応しくない。弟君こそ相応しい」と反論した。津堅親方の反論に、ほとんどの者がうなづいた。

最早これまでか、と思われたその時。議論の様子を眺めていた世子が、「よきに計らえ。私は、皆の意見に従う」と、皆の前で答えた。

これには、津堅親方も驚いた。世子は、チーグーではなかった。これでは、他の者たちは勿論、津堅親方さえも、世子の即位に異を唱えることはできなくなってしまったのである。衆議一決、世子は、王位に就くことができた。これで、大新城親方もほっと胸をなでおろすことができた。とはいえ、新国王、あいかわらずの無口で、人呼んで「チーグー王」とあだ名された。それが、第2尚氏王統第5代国王尚元であったという。（以下略）

さて、この物語に登場する「大新城親方」こそ、毛姓池城殿内の始祖である新城親方安基といわれている。安基は、16世紀の嘉靖年間、三司官に任じられている。同時に羽地間切の総地頭職を授けられ、「池城」の名島を賜っている。

先の伝説の真偽はともかく、安基は尚元王の即位にあたって尽力し、一旦は息子の安棟に家督を譲って三司官の職を辞した。しかし、尚元王の命によって再び三司官に就任し、具志頭間切新城の地頭職を賜った。

2世安棟は、尚元王代（1556～1572）に父親の跡を継いで三司官となり、尚永王（1573～1588）にも仕えた。しかし、1579年、訪問先の中国で客死している。

3世の安頼は、1592年に起こった謝名一族の反乱の鎮圧に功を挙げて紫冠（親方）となった。1609年、薩摩の琉球入りに際し、講和の任にあたり、尚寧王に従って江戸へ上った。1611年、三司官となり、王舅三司官として中国（明）へ赴き、1612年に制定された進貢の10年1貢という期間の短縮に尽力し、1622年、5年1貢とすることに成功した。しかし、翌年彼の地で病没した。明の天啓帝は、彼の功績に報いるために墓地を下賜、尚豊王は、彼を按司に追封して赤地五色浮織冠を与えた。これが勳功の著しい者に対する贈位の嚆矢となった。

6世安憲は、13歳で羽地間切地頭職を継ぎ、1670年に三司官となった。薩摩へ度々赴くとともに、1683年には、尚貞王の冊封使（正使汪楫、副使林麟焻）派遣に対する謝恩使に伴い、法司王舅として中国へ赴いている。

8世安倚は、1696年、耳目官として中国へ赴き、1699年、31歳という若さで三司官に任じられた。また、歌人としても知られ、中国（北京）からの帰途、錦を賜って、

誰も見よこれぞまことのからにしき

きたのみやこをたちいづる袖

と詠んだ和歌が残されている（一説には、祖父安憲のものとも）。

10世安命（在任期間：1760～1769）、12世安昆（同：1823～1829）、14世安邑（同：1848～1862）らも三司官を勤めている。

15世安規は、琉球処分期の1874年に三司官となり、翌年内務卿大久保利通の命によって上京し、鎮台支営設置、明治元号の遵奉などを押し付けられた。しかし琉球藩は、安規の帰国と共にやって来た内務大丞松田道之が示した、中国（清）との外交関係の廃絶などが盛り込まれた令達をはねつける。しかし、彼は再び陳情特使として東京へ赴き、1876年には退京を命じられるが、常に琉球の立場で、清国への恩義をもって折衝・陳情を繰り返した。1877年4月、疲労困憊して病を得、飯田町の藩邸において逝去した。

このように、池城殿内は、琉球王府時代を代表する名家中の名家として知られ、冒頭紹介した民話をはじめ、旧首里・那覇地区に特徴的な「親方話」といわれる民話に主人公として度々描かれ、地元の誇りとして人々に語り継がれている。

## 《参考文献》

那覇市教育委員会、『那覇の民話資料（第4集首里地区）』、那覇市教育委員会、1982年

沖縄大百科事典刊行事務局、『沖縄大百科事典』上巻、沖縄タイムス社、1983年

又吉眞三、『琉球歴史年表』、那覇出版社、1988年

那覇市企画部文化振興課、『氏集』、那覇市、1989年

沖縄県姓氏家系大事典編纂委員会、『沖縄県姓氏家系大事典』、角川書店、1992年

## 第Ⅲ章 調査の概要

### A. 調査に至る経緯と経過

沖縄県南部土木事務所は、首里山川町より首里儀保町に伸びる県道28号線の道路工事を推し進めている。その山川町地内に現状保存していた「池城殿内の井戸」の周辺についても歩道整備を行うことと合わせて石垣の改修工事を行うこととなった。当該石垣はガジュマル等の樹木の根によって崩壊する危険性が地域住民からも指摘され、緊急に石垣を撤去し改めて積み直す事となった。当教育委員会としては、石垣の撤去工事には当文化財課の職員が立ち会い工事を進めるよう調整を行った。

ところが、石垣を取り外したところその下位より埋蔵文化財「旧山川村跡」の時期と思われる遺物包含層が確認され、急便南部土木事務所とその取り扱いについて協議がなされた。協議の結果、工事の変更は困難なため、やむおえず記録保存の調査を行うこととなった。

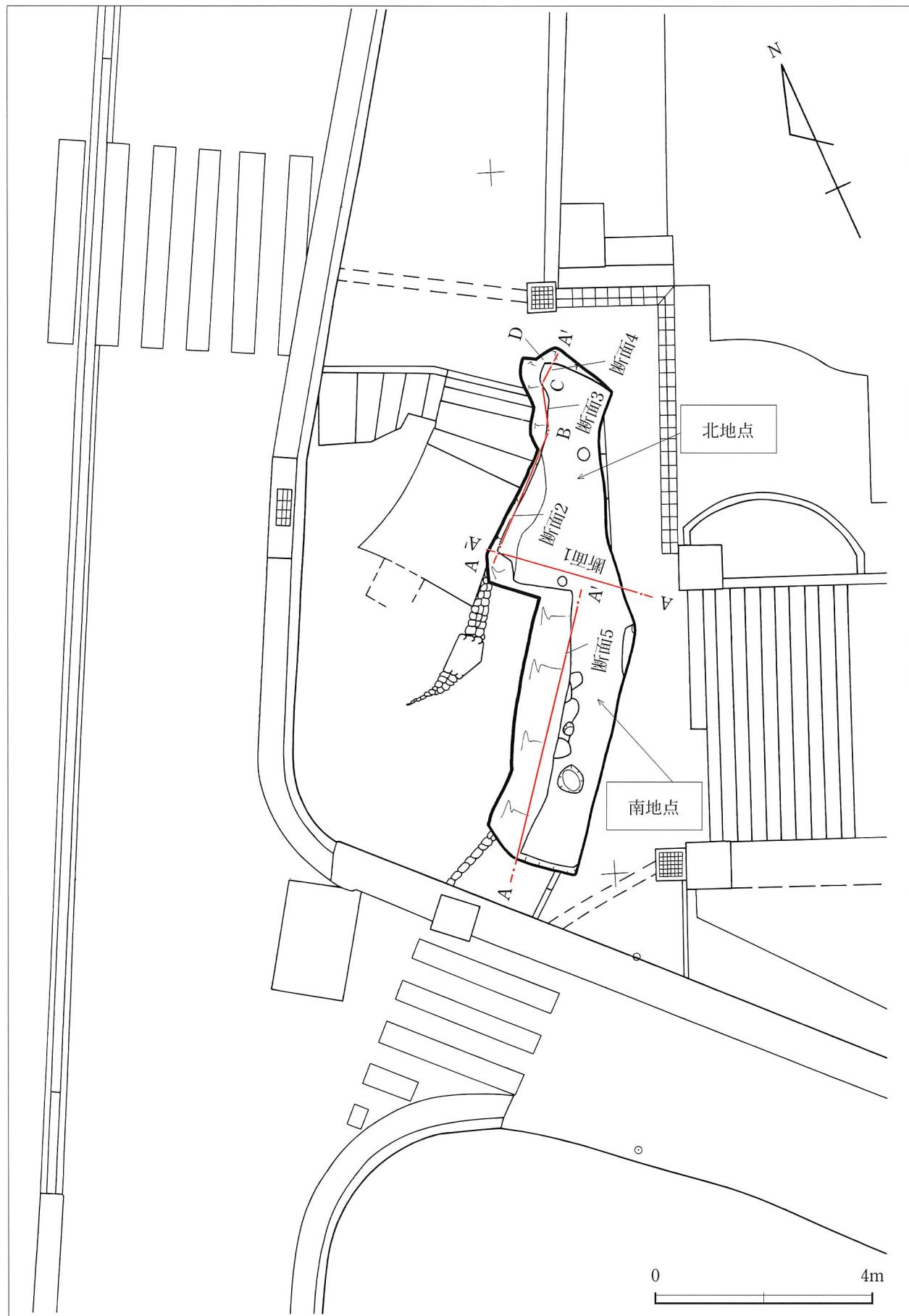
調査は平成12年8月11日～同年8月19日に終了した。

なお、調査体制は下記のとおりである。

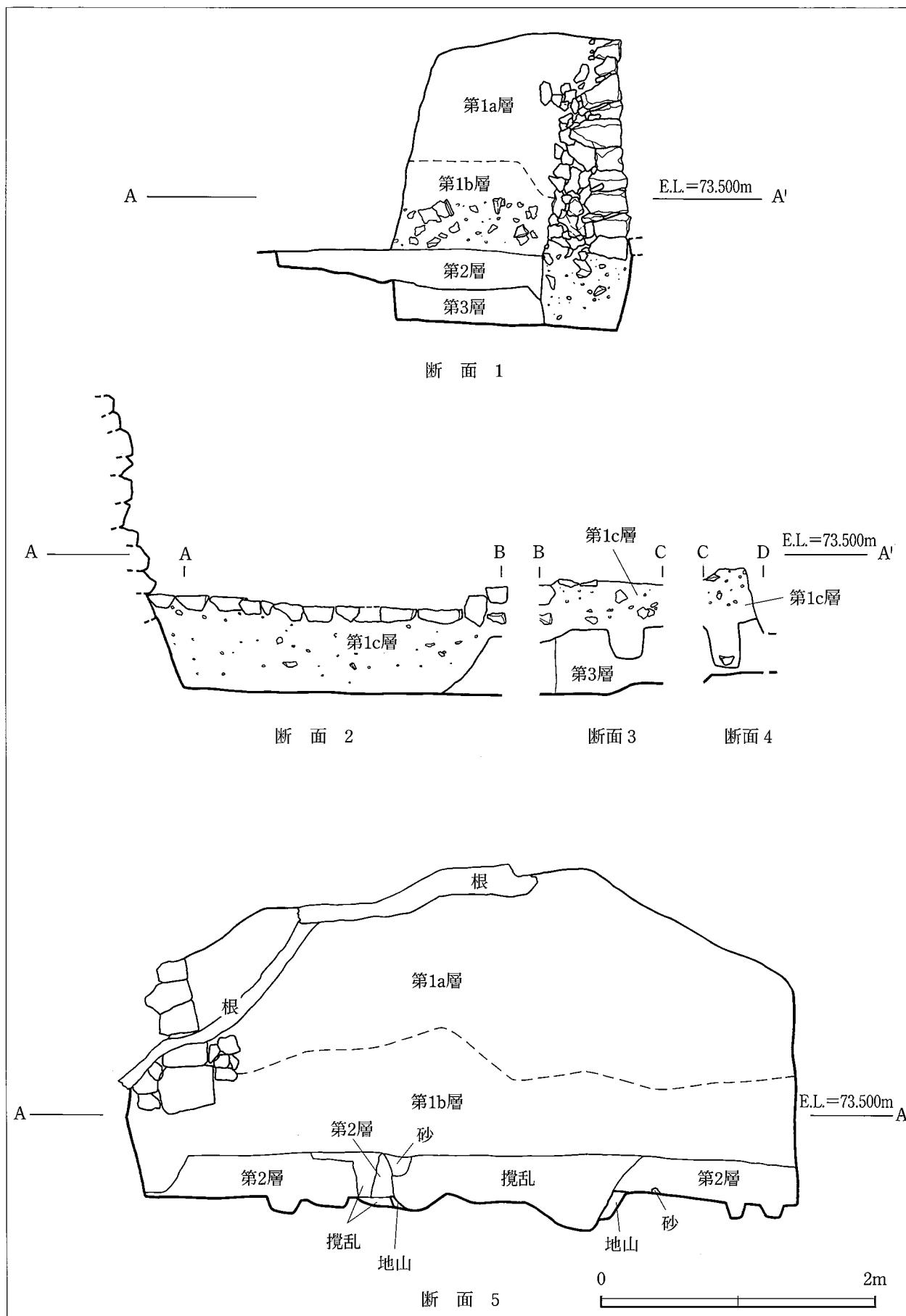
調査責任者 渡久地政吉 (那覇市教育委員会 教育長 平成12・13年度)  
 仲田美加子 (那覇市教育委員会 教育長 平成14年度)  
 調査総括 金武 正紀 (那覇市教育委員会 文化財課 課長)  
 事業事務 喜納 曜 (那覇市教育委員会 文化財課 埋蔵文化財係 係長)  
 調査員 島 弘 (那覇市教育委員会 文化財課 埋蔵文化財係 主査)  
 仲宗根 啓 (那覇市教育委員会 文化財課 埋蔵文化財係 主事)  
 當銘 由嗣 (那覇市教育委員会 文化財課 埋蔵文化財係 主事)  
 調査作業員 玉井建設が直接雇用した。

第1表 遺物出土一覧

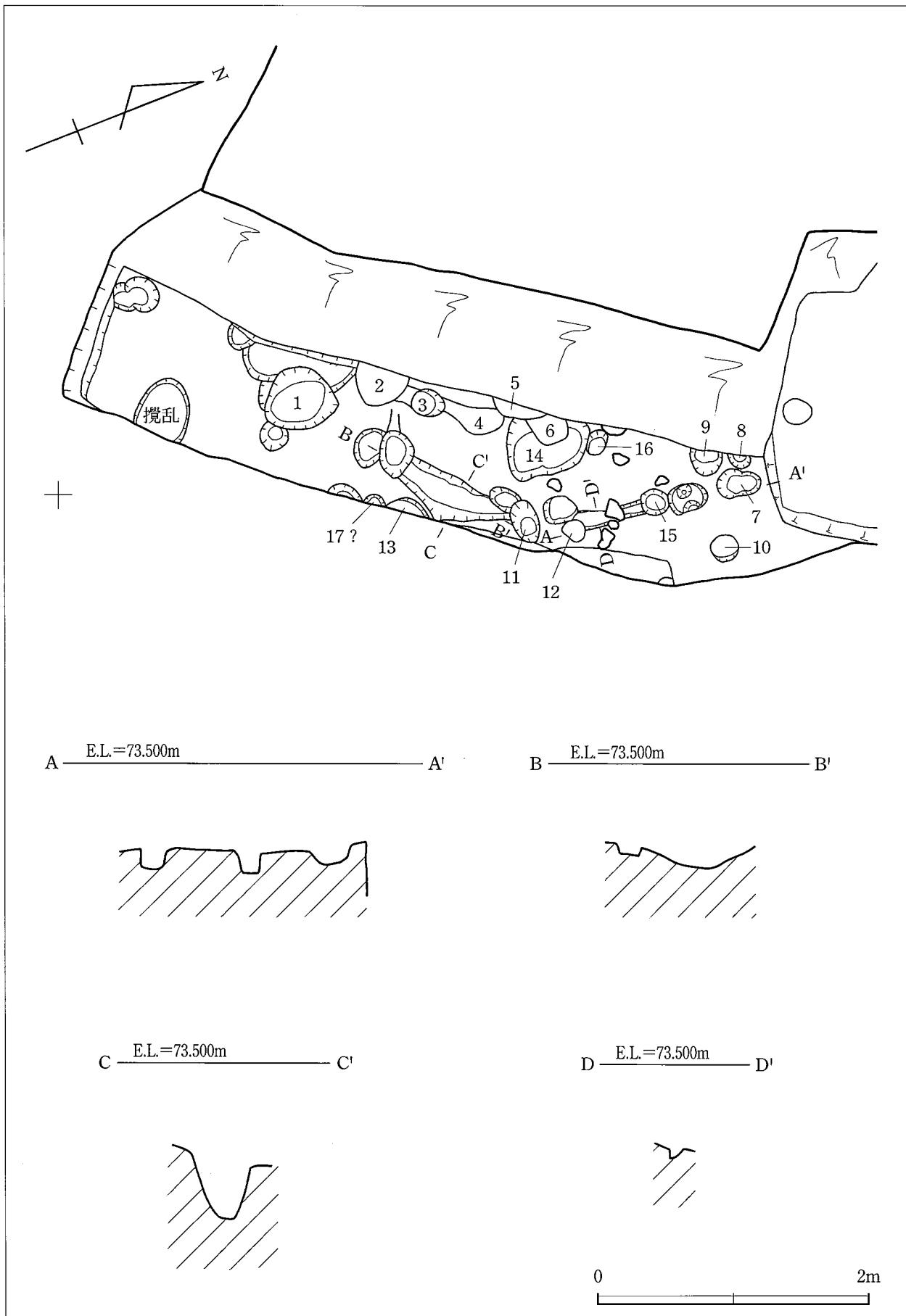
種類 層序	白磁		青磁		青花		天目		碧玉 翡翠 青玉		不明		褐釉陶器		施釉陶器		無釉陶器		陶質土器		瓦		高麗 系瓦		土器		燐灰 盤		炭		鉄滓 ?		金属製品		焼 土		骨 貝		さん ご		合 計
	口 緑	胸 部	底 部	口 緑	胸 部	底 部	口 緑	胸 部	底 部	口 緑	型 物	口 緑	胸 部	蓋	口 緑	口 緑	胸 部	摘 み	口 緑	陶 器	灰 色	赤 色	瓦	高 麗 系 瓦	土 器	燐 灰 盤	炭	石	鉄 滓 ?	金 属 製 品	錢 貨	青 銅 製 品	鐵 釘	燒 土	骨 貝	さん ご					
表採	1			1	1			1		1	2				1	2	3	5								1			5	1	25										
第1層				4	2		1	1					2	1						10	13					1			1	1	37										
第1c層	1					1											1	14	1	1					1			1		21											
第2層0/10	1	1	1	11	27	3	2	7	2	1	1	30		1	2			14	2	14	1	1	4		1	5	12	3	147												
第2層10/20	1	19	15	1	1	2	1	1		1	10		1				6	2	1	8		2	2	1	1	4	39	3	122												
第2層20/30		1	6								1						2		5		4			7	2		28														
第2層20/30集石		1	1								1								1		2			1	1		1		8												
不明		1																												1											
攪乱ピット1						1					3								1		2									7											
攪乱ピット2			2																												2										
攪乱ピット3											2																				2										
攪乱ピット4			1																1		1									3											
攪乱ピット5																		1												1											
攪乱ピット6		1	2			1					1																		1	6											
ピット7											1																			1											
ピット8																													3	1											
ピット9																			1										1												
ピット10																			1										1												
ピット11			1								2								1										4												
ピット12				1										1						1									1												
ピット13																				1									2												
ピット14		4	2			3												2	1	1								3													
ピット15			1																										1												
ピット16																				1	1							2													
ピット17			1																										1												
合計	3	2	2	47	58	4	3	16	5	1	2	55	1	1	1	3	1	3	0	51	24	1	37	1	2	17	4	1	1	25	61	11	2449								
	7			109		24	1	1	1	58		1		5	3	0	51	24	1	37	1	2	17	4	1	1	25	61	11	2											



第3図 調査地区と層序ライン



第4図 各ライン層序



第5図 南地点ピット平面図と断面図

## B. 調査の内容

調査は西側の積み直しを行う石垣部の範囲のみを行った（第3図）。調査区は層序（断面1）A-A'ラインで、南北の2地点に分けられるが、北地点は既に井戸・石垣の造成時に破壊されたものと思われ遺物包含層は確認出来なかった。一方、南地点は比較的良好に遺物包含層が残っており、調査はこの南地点をメインに行った。調査はこの南地点の下位に広がる黒褐色の遺物包含層を残し、池城殿内の井戸の土木工事に伴う造成土（第1層）の除去作業より開始した。その後、遺物包含層の第2層の発掘を実施した。第2層を完掘後に赤褐色粘質の地山面が露出しはじめた。その地山面に赤褐色と黒褐色の落ち込みが見られた。以下、層序と遺構について簡記する。

### 1：層序（第4図）

層序は池城殿内の井戸の土木工事に伴うものとそれ以前のものに大別される。  
前者が第1層でa～cまで細分され井戸の構築工程が観察される。以下、略記する。

第1  
└ a層：暗褐色土層でサンゴ片等の小礫を多量に含む。  
└ b層：茶褐色の粘質土層で壺屋焼陶器・灰色瓦等を含む。  
└ c層：暗褐色土層で石灰岩の小礫を多く含む。灰色瓦が出土する。

後者の層は第2層（黒褐色土層）で厚さ約30cmを測る。本層は第1b・c層に削平され僅かに残る土層で、16世紀代中国産陶磁器等を含む未搅乱土層である。

第3層：赤褐色粘質土層で地山である。沖縄の方言で「マージ」と通称されている土層。

### 2：遺構（第5図）

遺構は地山面にピットと石敷きが検出された。以下、略記する。  
ピットは赤褐色・灰褐色と淡茶褐色と炭混じりの黒褐色の4種が見られた。赤褐色土のピットはホロホロして締まりの悪い土層で植木等の樹根痕と思われ、灰褐色も赤褐色と同じ土質を呈していた。2者とも後世のものと解した。一方、淡茶褐色と黒褐色のピットは北側部で顕著に見られ、僅かに中国産陶磁器等が発掘された。このピット群で注目されたのは、ピットとほぼ同レベルで確認された不定形の石敷き遺構（雨端？）を発掘後その下位から溝が確認され、全体を精査するとピット間を浅く溝で結ぶ形で弧状に検出された。限られた発掘面積のためプランはおさえられなかったが、今後留意される遺構かと考える。

### 3：出土遺物

今回の調査で得られた資料は第1表に示したとおりで総数449点である。その殆どが小破片である。遺物の種類を見ると中国産・日本産・沖縄産等の陶磁器等を中心に多種多様なものが出土した。以下、中国産陶磁器より述べるが、個々の観察については第2表に示した。

#### 白磁（第6図1～4）

第1表に示したとおり、破片で7点得られた。器種の判るものとしては、皿・杯・碗（？）類の3種であった。

皿形は内傾ぎみに立ち上がる皿（1）と置付けを露胎にする外反皿（2・3）が得られている。4は

端反り杯である。碗形（？）は細片のため示していない。

#### 青磁（第6図5～8、第7図1～4）

第1表に示したとおり、破片で109点得られた。器種の判別できるものとして、碗・皿・壺等である。

碗形は 外反碗と直口碗の2種が見られた。第6図5・6は外反碗で、5は内外面に範描文・6は無文のものである。同図7・8は直口碗で、7は細蓮弁文・8は口唇部付近に沈線を1条浅く巡らす。

皿形は第7図1が稜花皿で、同図2が口折れの蓮弁文皿、同図3が無文外反皿等が出土している。壺形として酒会壺（同図4）の腰部が得られ、腰部には範彫りの蓮弁文を巡らす。

#### 青花（第7図5～7）

第1表に示したとおり、破片で24点得られた。器種の判るものとして、皿・碗形のみであった。同図5は外反皿で、外面に圈線と草花文、内面口縁端部に圈線が描かれたものである。

碗形（同図6・7）は高台片が得られた。6は高台の高い碗で、高台脇・際に菊花散らし文と2条圈線を描き、高台内にも2条圈線を施す。見込みにも圈線と文様を描く。7は高台脇に草花文、内外圈線と銘款を描く。銘款は判読不明。見込みにも文様が見られるが、全体不明。

#### 翡翠釉（第7図8）

白色の磁器土に翡翠釉を施した外反した小皿である。口唇部内面に沈線を1条巡らす。器表面はザラザラしており釉薬が剥落したのか、2次焼成を受けたのか判然としなかった。

#### 型物（第7図9）

上げ底状の底面から端反りに立ち上がる型物の杯である。外面に灰色釉・内面に白色の釉薬を掛け分けたもので、底部の立ち上がりと底面は露胎である。白磁の杯の可能性が高いが、今回は取りあえず外面の釉薬が異なると思われたので別項で扱った。

#### 褐釉陶器（第8図1）

第1表に示したとおり、破片で58点が得られた。その殆どが胴部片で、器種の判るものとして壺・鉢・蓋等である。その中で摺り鉢のみを図示した。口縁部を嘴状にする摺り鉢で、釉薬は口縁部上端の内外面に薄く施しものもので、7本一組の櫛目を用いて内底面より摺り上げらている。口径25.6cmを測り、第2層10／20より出土。

#### 備前陶器（第8図2）

口縁部が僅かに1点確認された。全体に色調・素地とも灰褐色を呈したもので、田土を用いたものと思われる。本品は摺り鉢と思われるが、破片のため摺り目は確認されない。第2層0／10より出土。

#### 沖縄産陶器（第8図3～5）

第1表に示したとおり、施釉・無釉陶器が僅かに8点得られている。ちなみに陶質土器（アカムン）は得られていない。その中より、図面化できるものを示した。

3は内・外面に薄く褐釉が施されたもので、外面の釉薬には光沢が見られる。玉縁の口唇部を持つ長頸壺の器形を呈する。素地は暗褐色を呈し白いスジ状の混入物を含む。壺屋焼には見られない素地で喜名焼の系統かと思われる。4は沖縄で「ミズクブサー」と通称されている壺屋焼の水鉢である。外面に波状沈線を巡らす。口径16.8cmを測る。3・4とも表面採集品である。5は短頸の壺で、素地が赤褐色を呈し焼成がやや甘い。素地に焼土粒を含む。喜名焼（？）か判然としない。口径10.0cmを測り、第1c層より出土。

#### 円盤状製品（第8図6）

僅かに1点の出土をみた。褐釉陶器の胴部片を丸く打ち欠いたものである。径は約2.9cmを測る第2層0/10からの出土。

#### 錢貨（第9図1）

「熙寧〇〇」の半欠品で、表裏面とも摩耗が著しい。初鋳年は北宋1071年である。第2層0/10より出土。

#### 青銅製品（第9図2）

隅丸三角形の環状製品である。表面は青銅が著しいが、僅かに下端面に鍍金が観察される。本来は全面に施されたものと思われる。また、下端面には接合痕も観察され、棒状の製品を折り曲げ制作されたことが窺えるものである。重さ13.9gで第2層10/20出土。

#### 鉄釘（第9図3）

全体に鏽ぶくれが著しいが、幅広の頭部をL字状に折り曲げた角釘である。重さ27.8g、第2層10/20出土。

#### 鉄滓？（第9図4～6）

鉄滓と思われるものが、破片で4点確認された。4は内側に暗褐色の鉄滓の溶着が全面に見られ、外側に赤褐色の土壁（？）が見られるものである。鉄滓は磁気化を帯び、赤褐色土には石灰質砂粒・ガラス質鉱物が観察される。炉の一部が注目される資料である。第1c層より出土。5は表採資料であるが、重さ105.6gで重量感のある鉄滓である。表面には鉄鏽も散見でき、磁気化が著しい。6は濃い灰褐色を呈したもので、表面に加熱による光沢した箇所が観察されるものである。磁気化をしているが微弱である。重さ13.4gで第2層10/20より出土。

#### 瓦

第1表に示したとおり、破片で76点得られた。殆どが明朝系瓦で灰色瓦と赤色瓦が見られた。その他に高麗系瓦が1点出土した。以下、略述する。

#### 高麗系瓦（第10図1）

外面に格子文と羽状叩き文、内面には糸きり痕が観察できる平瓦である。第2層10/20より出土。

### 明朝系瓦

#### 灰色瓦（第10図2～4）

2は丸瓦の玉縁部を破損したものである。外面には縦位に漆喰が残り、内面には布目痕と玉縁面取り痕が残る。端部は未調整で割り痕が観察される。第1層より出土。3・4共に平瓦で内面に布目痕、外面は笠調整が施されたものである。下端面は調整が見られるが、端部は未調整である。前者が第2層0／10、後者が焼成良好で第1c層より出土。焼成は2・3が甘く、4は堅致である。

#### 赤色瓦（第10図5・6）

5は丸瓦で明橙褐色を呈したもので、焼成が甘い。内面に布目痕と玉縁面取り痕が見られる。端部は平滑でナデ消したのか判然としない。6は平瓦の下部片で、赤褐色を呈している。焼成は良好である。内面には布目痕が観察され、両端部には打割のための凹みが見られる。端部は未調整。外面はナデ消しが施されている。5・6ともに表採資料である。

### ヤコウガイの蓋（第11図1）

1点得られた。下端面は剥離痕が顕著に見られかなり使用したものと思われる。また、本品はかなり風化が著しく白色化を呈している。手に触ると貝粉は指頭に残る。第2層0／10より出土。

### ウマ（第11図2）

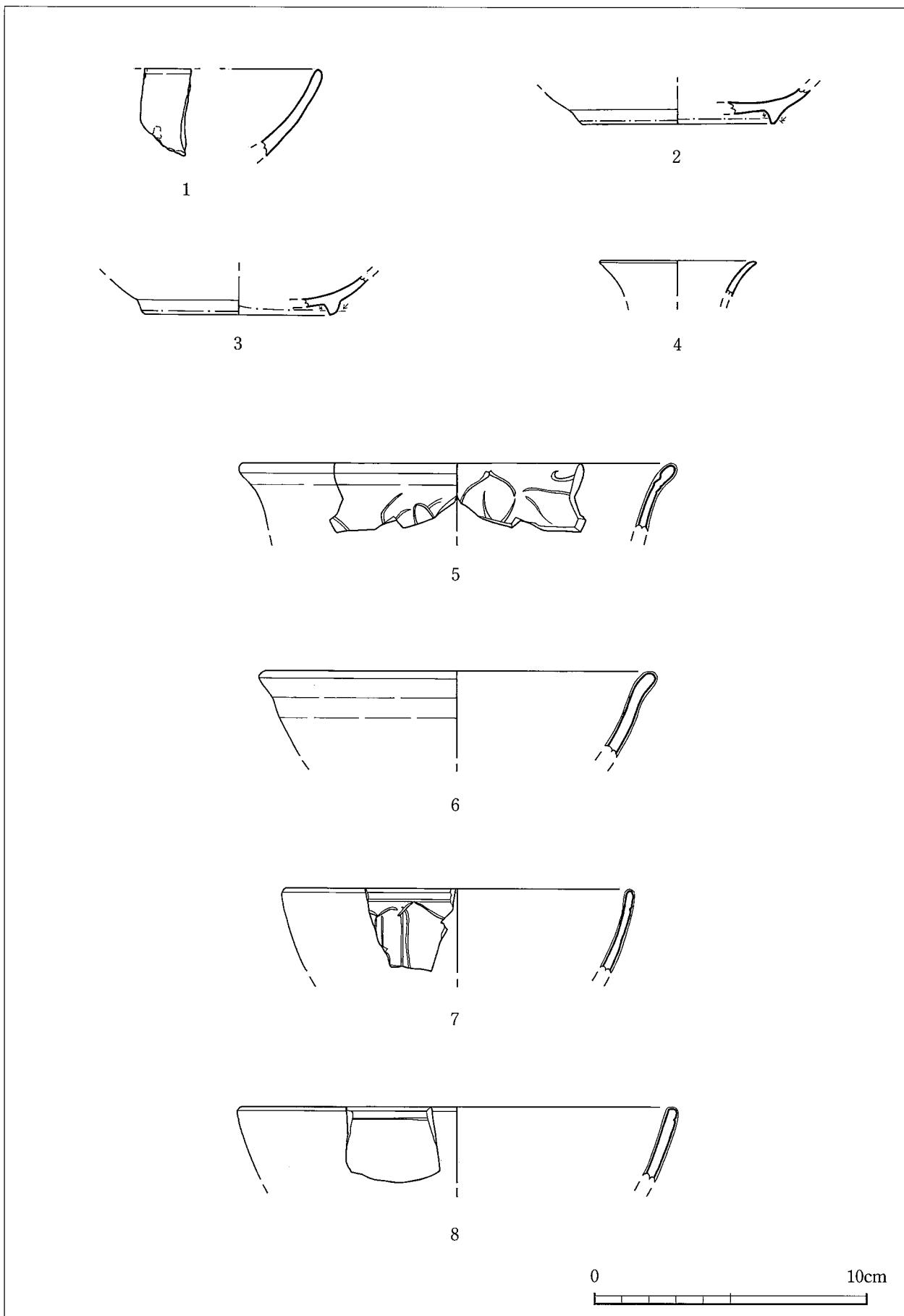
ウマの右寛骨が1点得られている。骨端部には鋭利な刃物で切断された痕が観察される。第2層10／20から出土。

### シカ（第11図3）

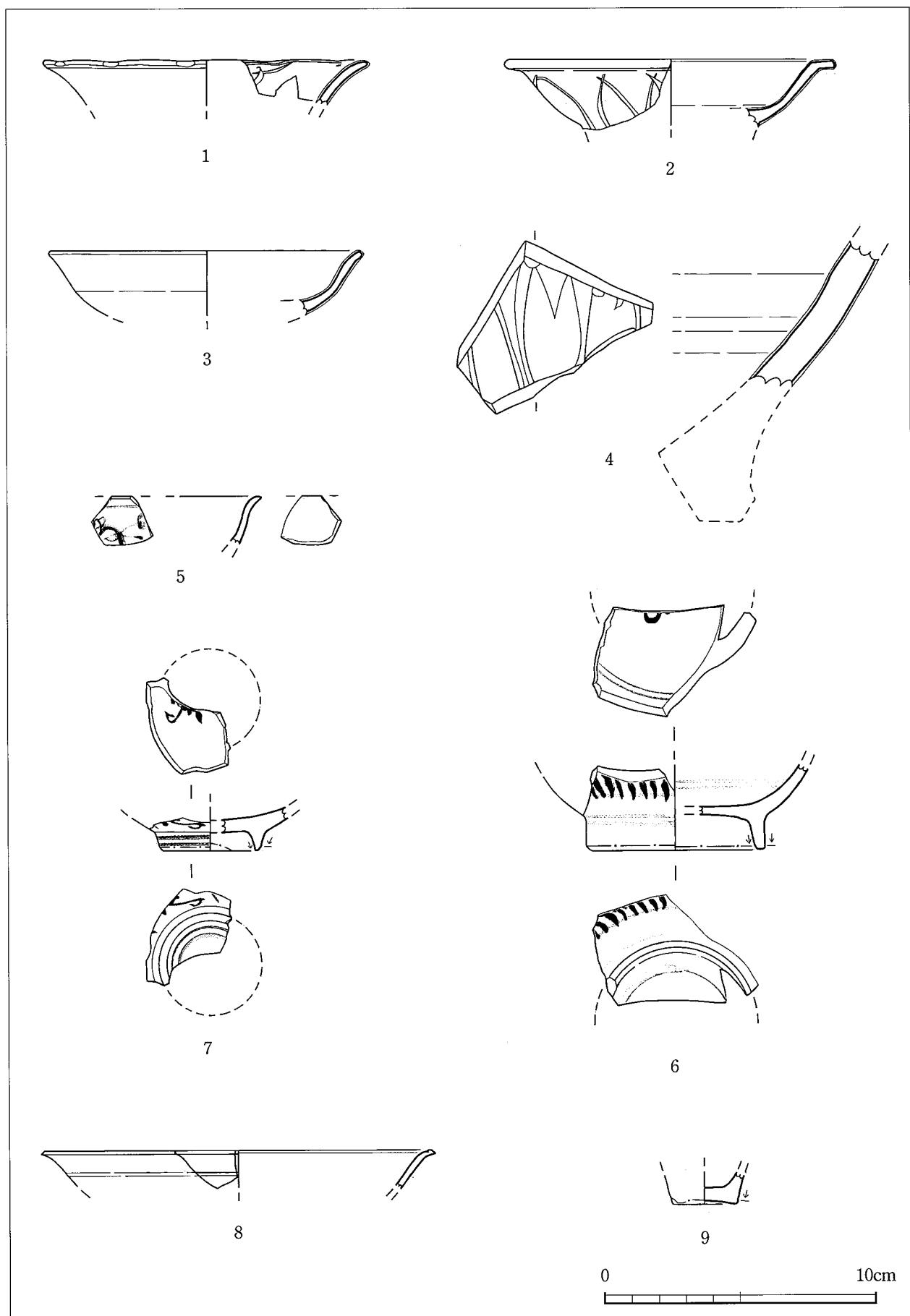
シカの角が1点得られている。先端部は破損しているが、全体を窺える資料である。人工的な要素は確認できなかった。第2層10／20より出土。

第2表 遺物観察一覧

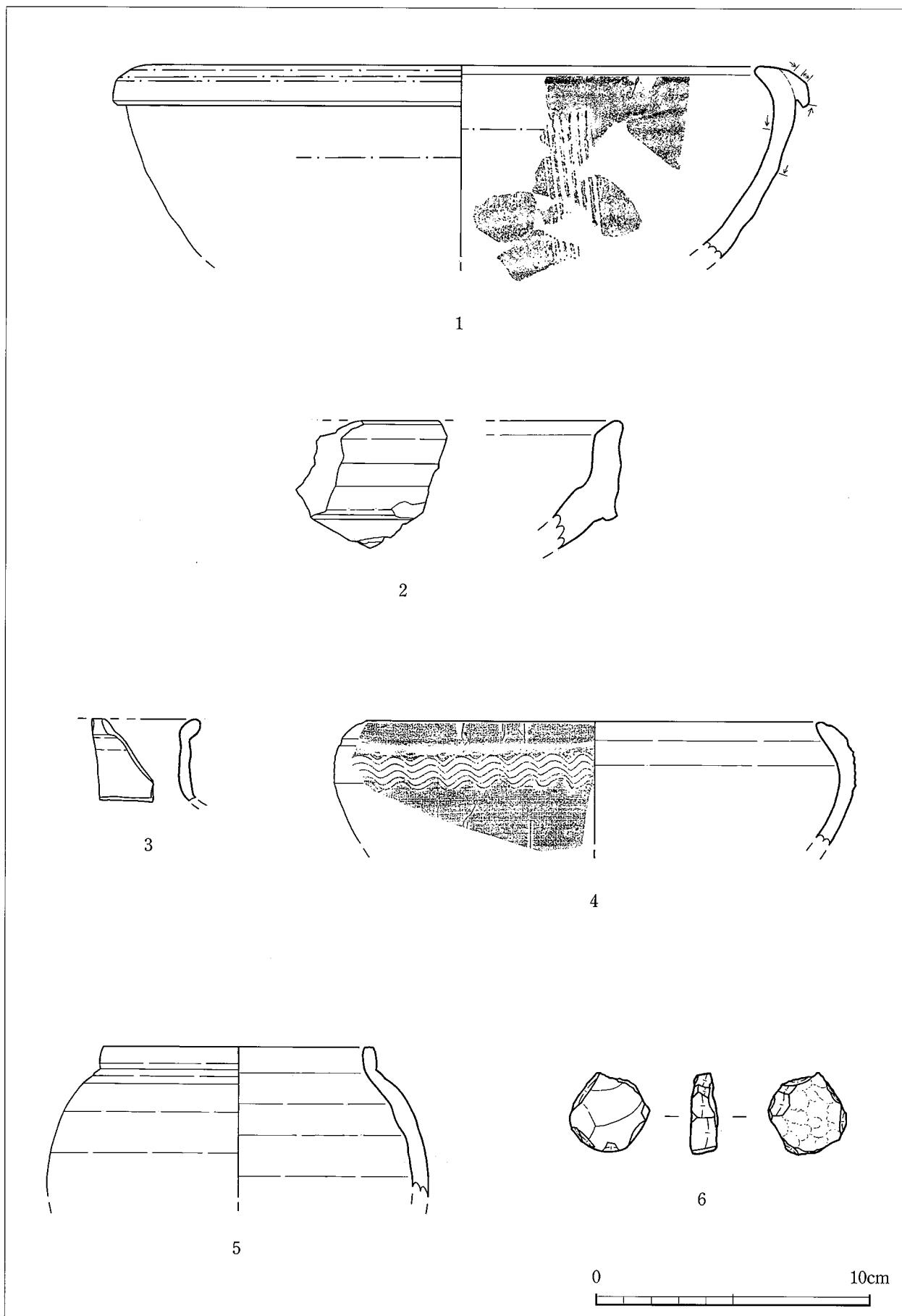
挿図番号 図版番号	種類	器種	口径 器高 底径	素地	施釉	文様	釉色	貫入	出土地点 出土層位
第6図 図版5の1	白磁	皿	一一一	灰白色で微粒子	内外面に薄い透明釉を施す	なし	白色	なし	第1c層
〃2 〃2	〃	〃	一一7.2	淡灰白色で微粒子	内外面にやや薄い透明釉を施す。置付け付近は露胎。	〃	乳白色	〃	不明
〃3 〃3	〃	〃	一一7.1	〃	〃	〃	〃	〃	第2層0/10
〃4 〃4	〃	杯	5.8 一一	白色で微粒子	内外面に薄い透明釉を施す。	〃	白色	〃	第2層0/10
〃5 〃5	青磁	碗	16.0 一一	灰白色で微粒子	内外面にやや厚い釉薬を施す。	内外面に草花文	緑色	〃	ピット11
〃6 〃6	〃	〃	14.6 一一	灰白色で粗粒子	〃	なし	〃	細かい貫入あり。	ピット17?
〃7 〃7	〃	〃	13.0 一一	淡橙褐色で粗粒子 白色の粒子が散見	〃	細蓮弁文	オリーブ	〃	ピット14
〃8 〃8	〃	〃	16.2 一一	灰白色で粗粒子	〃	なし	緑色	〃	第2層10/20
第7図 図版6の1	青磁	皿	12.0 一一	〃	内外面に薄い透明釉を施す。	内面に2条圏線と草花文	緑褐色	〃	第2層10/20
〃2 〃2	〃	〃	12.2 一一	灰色で粗粒子	光沢が見られない。	蓮弁文	緑灰色	なし	第2層10/20
〃3 〃3	〃	〃	11.6 一一	〃	内外面に薄い透明釉を施す。	なし	緑白色	〃	ピット14
〃4 〃4	〃	壺	一一一	灰白色で微粒子	内外面に厚い透明釉を施す。	籠彫り蓮弁文	淡緑白色	大ぶりの貫入が見られる。	第2層0/10
〃5 〃5	青花	皿	一一一	淡白色で微粒子	内外に薄い透明釉を施す。	圏線と草花文		なし	第2層0/10
〃6 〃6	〃	碗	一一6.6	〃	内外面に薄い透明釉を施す。置付けは露胎。	菊花ちらし文と圏線 見込みにも文様あり		〃	表採
〃7 〃7	〃	小碗	一一3.8	白色で微粒子	〃	草花文と圏線 見込みと高台内に文様あり		〃	第2層0/10
〃8 〃8	陶器	皿	14.5 一一	灰白色で微粒子	内外面に翡翠釉を施す。	口唇内面に沈線を1条巡らす。	淡い緑色	〃	第2層0/10
〃9 〃9	型物	杯	一一2.5	白色で微粒子	外面に灰色釉内面に透明釉を施す。 底面は露胎。		淡灰白色	〃	第2層0/10



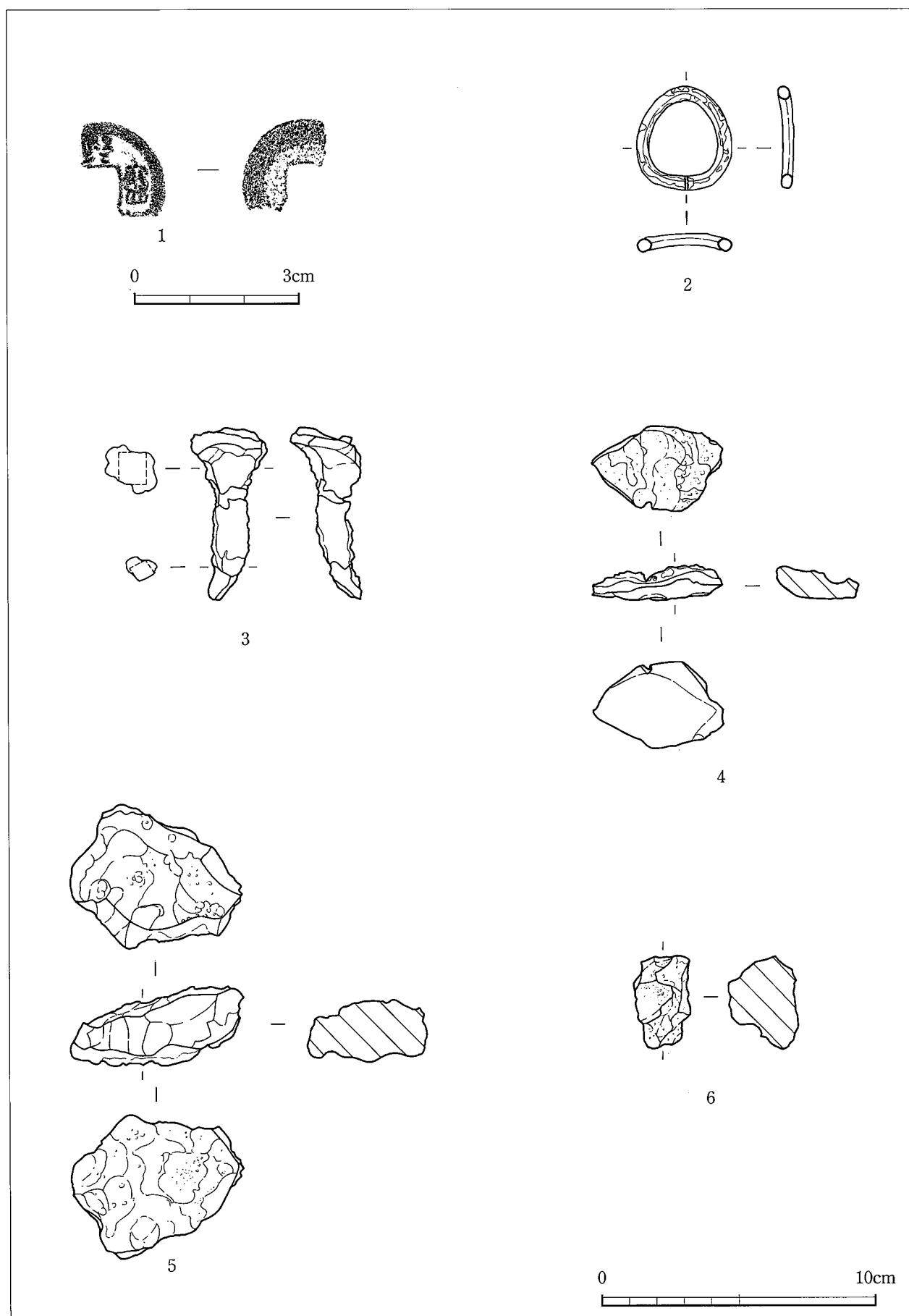
第6図 (図版5) 白磁:皿(1~3)・杯(4)、青磁:碗(5~8)



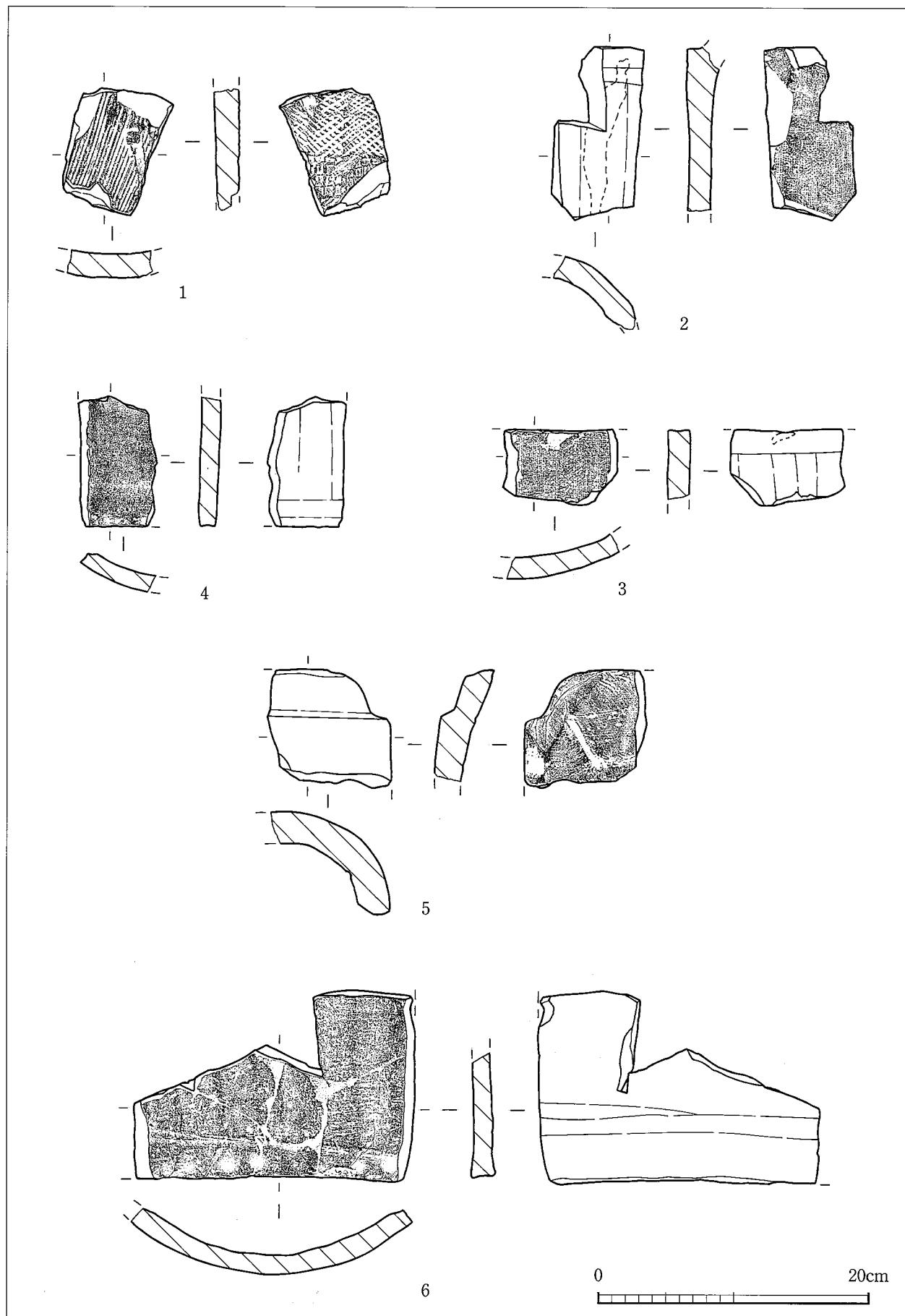
第7図 (図版6) 青磁:皿(1~3)・壺(4)、青花:皿(5)・碗(6・7)  
翡翠釉:皿(8)、型物(不明):杯(9)



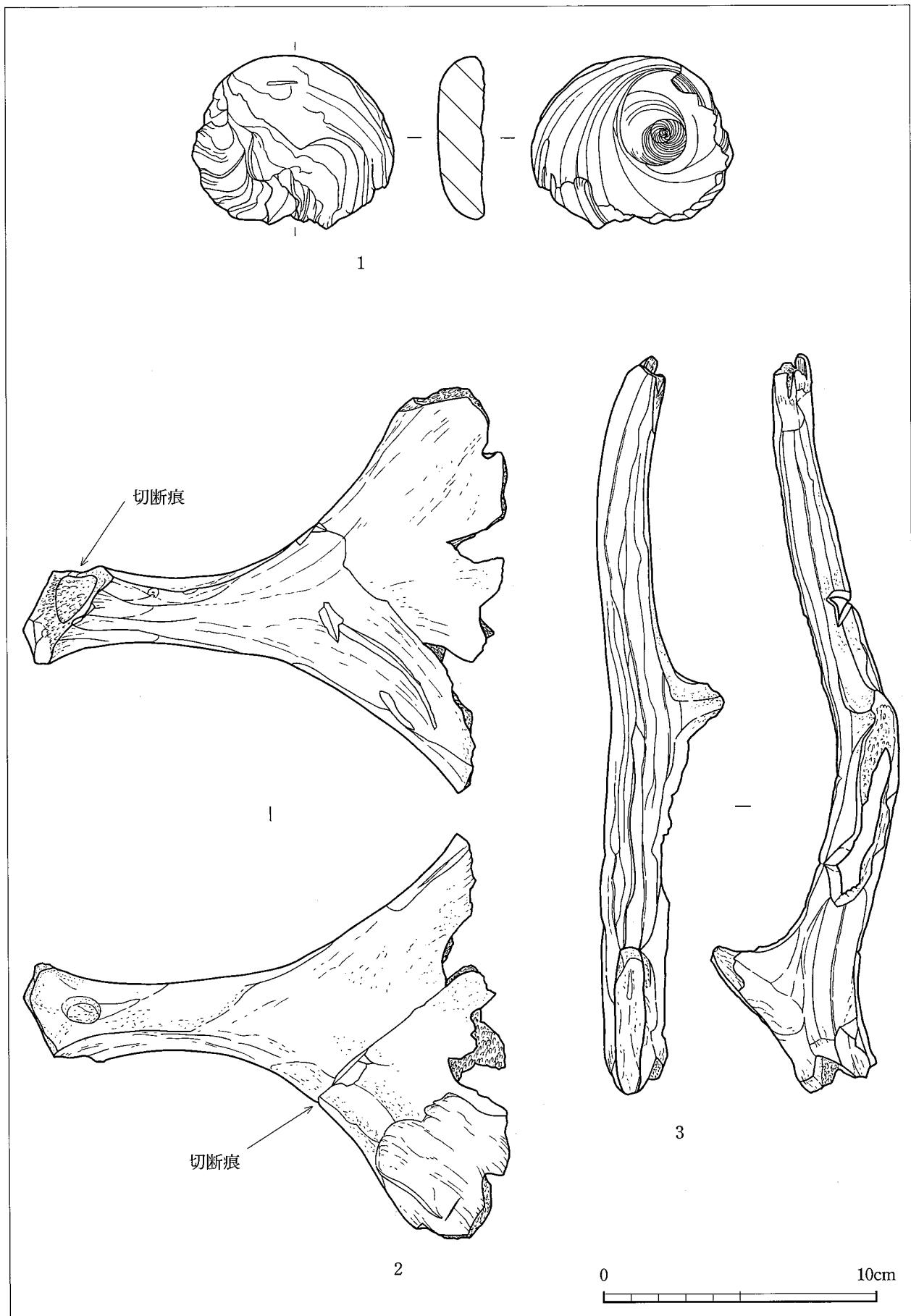
第8図 (図版7) 褐釉陶器：摺鉢(1)、備前陶器：摺鉢(2)  
沖縄産陶器：壺(3・5)・水鉢(4)・円盤状製品(6)



第9図 (図版8) 錢貨(1)、青銅製品(2)、鉄釘(3)、鉄滓? (4~6)



第10図 (図版9) 高麗系瓦: 平瓦(1)、明朝系瓦(灰色): 丸瓦(2)・平瓦(3・4)  
明朝系瓦(赤色): 丸瓦(5)・平瓦(6)



第11図 (図版10) ヤコウガイの蓋(1)、ウマの寛骨(2)、シカの角(3)

## 第Ⅳ章 ま と め

以上、発掘調査の成果について述べた。調査に至る経緯については、第Ⅲ章でも述べたように、池城殿内所在の井戸の石垣の改修工事に伴って発見されたのがきっかけであった。池城殿内についての歴史的背景については、第Ⅰ・Ⅱ章において詳細に紹介されているので参照頂きたい。ここでは、僅か16 m<sup>2</sup>の発掘調査であったが、調査成果をいま一度整理して若干の要点に触れまとめとしたい。

層序は第1～3層の3枚が確認された。第1層は池城殿内の井戸を構築する際のもので、第2・3層を切る形で検出された。第1層はa～cに細分され、c→b→aの順に造成工事が成されたことが明らかになった。時期的には少なくとも16世紀後半以降と考えられる。

第2層は、南地点で僅かに確認された遺物包含層である。北地点は、井戸の構築の際に攪乱されており詳細は不明である。得られた遺物の殆どが、本層からの出土である。遺物包含層の広がりは、既に道路・マンション建設等で破壊され押さえられないが、周辺の地形より推すと遺跡の本体部はマンション側にあり、県道側へ堆積したものと思われる。第3層は無遺物層といわゆる地山である。本層上面でピット群が検出された。

遺構は、石敷き遺構とピット群が確認された。前者が家屋の雨端を想定したが、調査範囲が限られておりプランや性格等は掴めなかった。後者についても同様であったが、最下部で確認された弧状の溝で繋ぐピットは、今後注目される遺構かと考える。類例資料としては、天界寺跡<sup>註1</sup>で検出された円弧状遺構がある。

出土遺物は第1表に示したとおり、自然遺物と人工遺物に大別できるが、いずれも小破片で得られた。前者は希少であったが、ウシ・ウマ・ブタ等<sup>註2</sup>の獣骨が得られた。その中で、全形を窺えるシカの角が出土したことは、注目される資料かと考えられる。シカの遺存骨が得られている遺跡としては、首里城跡<sup>註3</sup>・天界寺跡<sup>註4</sup>等がある。天界寺跡では角や四肢骨等が得られており、四肢骨は食用に供されている。

人工遺物では中国産・日本産・沖縄産等の陶磁器類が多く出土しており、中でも中国産青磁片が多い。時期的には16世紀～18世紀にかけて見られるものであるが、主体は16世紀後半である。その他に、瓦類・錢貨・金属製品等も得られている。

以上のことから、本遺跡は首里城を中心とした城下町の屋敷跡と考えるが、発掘調査面積に限りがあり詳細は判然としなかった。今後の首里城下の発掘調査において、僅かであるが貴重な資料を提供了したものと考える。

### 《註》

註1 a：島 弘・渡久地政嗣・當銘由嗣『天界寺跡』那覇市教育委員会 2000年3月

b：島袋洋・西銘章他『天界寺跡（Ⅱ）』沖縄県立埋蔵文化財センター 2002年3月

註2：獣骨について、金子浩昌氏（東京国立博物館）・瑞慶覧尚美氏（沖縄県立埋蔵文化財センター）の両氏より教示を得た。記して感謝する。

註3：盛本勲・比嘉優子他『首里城跡一管理用道路地区発掘調査報告書一』沖縄県立埋蔵文化財センター 2001年3月

註4：註1 bに同じ

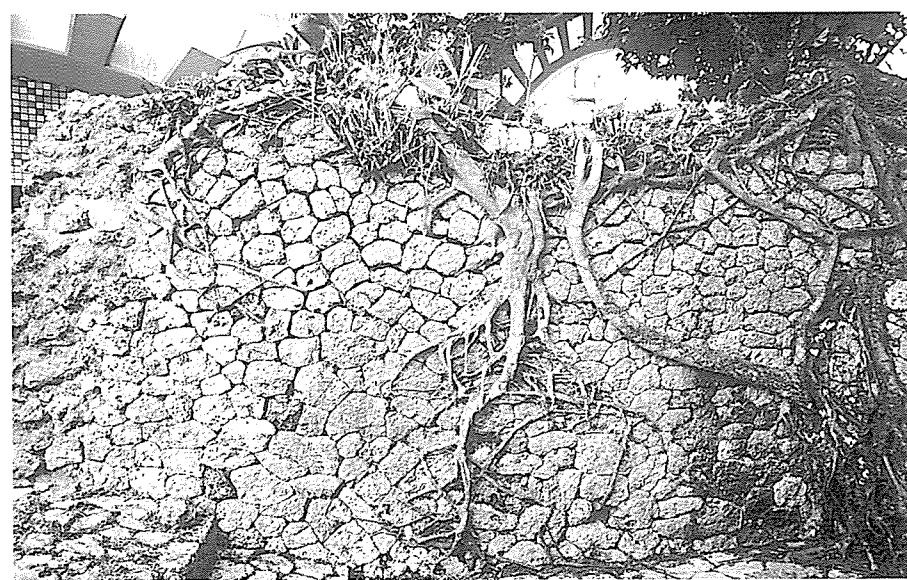
# 図 版



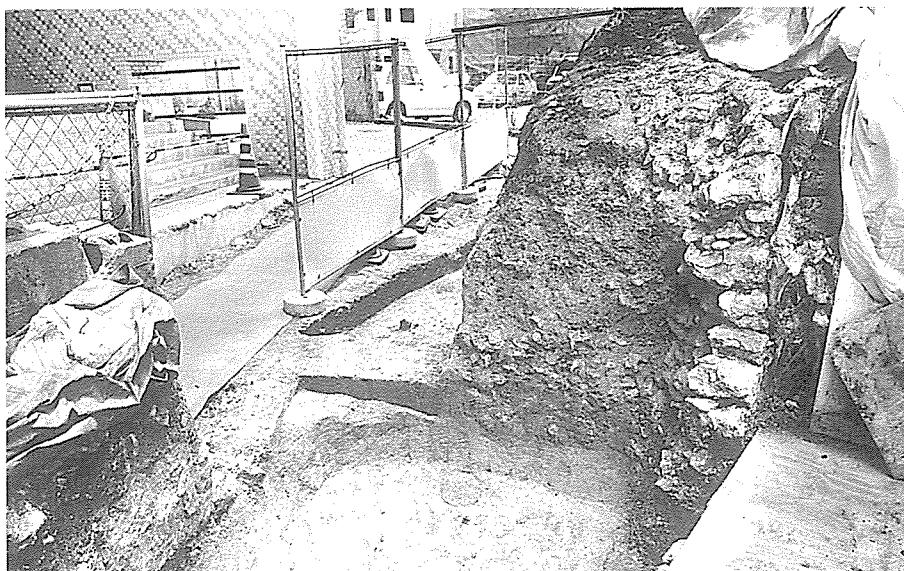
遺跡の遠景



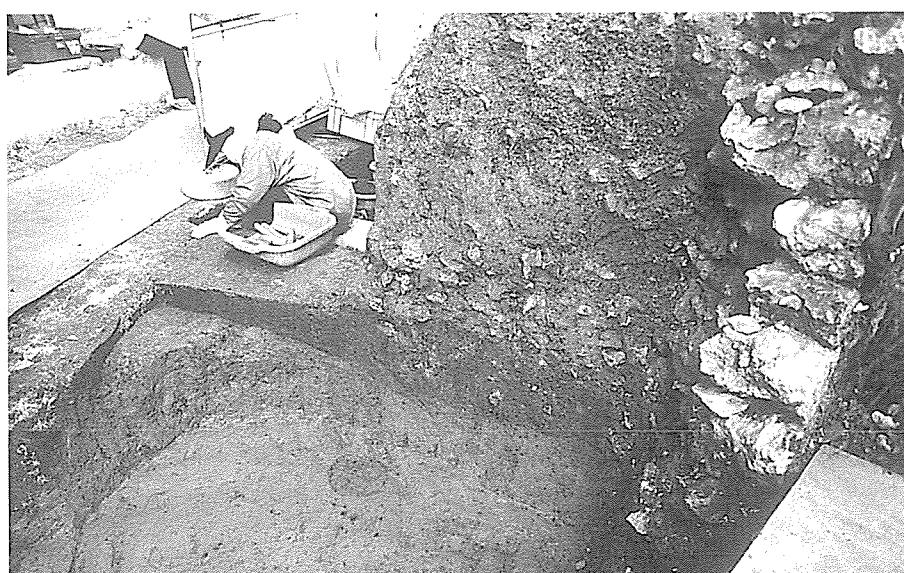
池城殿内の井戸正面



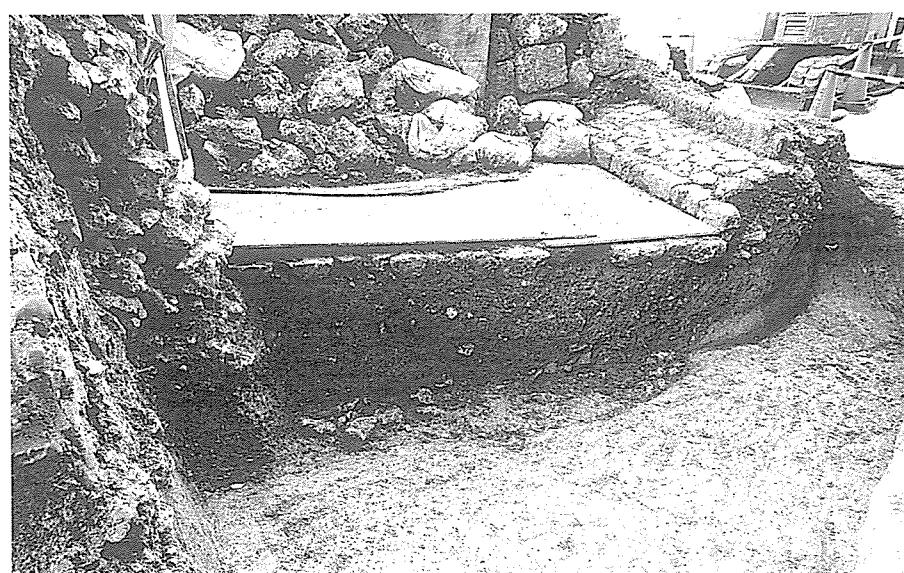
池城殿内の井戸の石垣



調査区

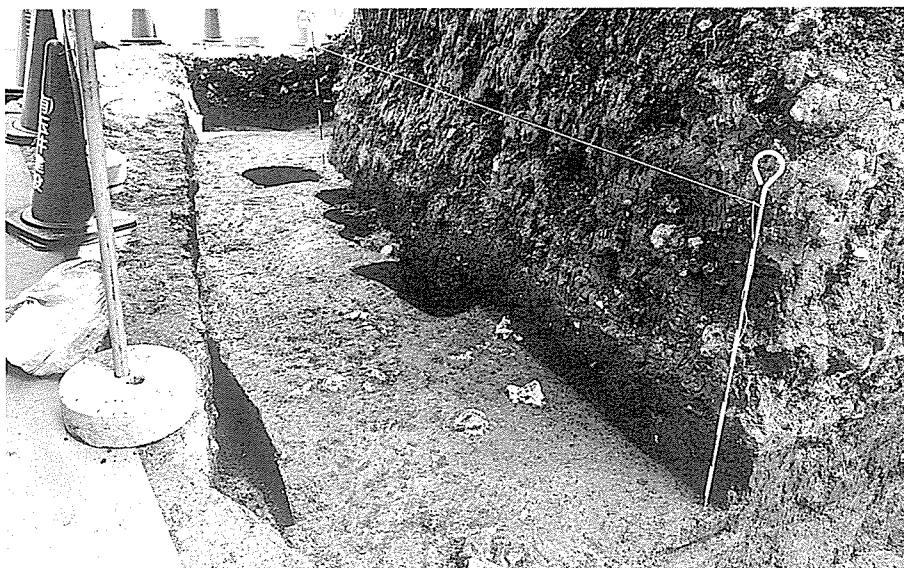


調査風景



池城殿内井戸の層序

図版2



南地点層序



南地点遺構状況



シカの角出土状況



石敷遺構

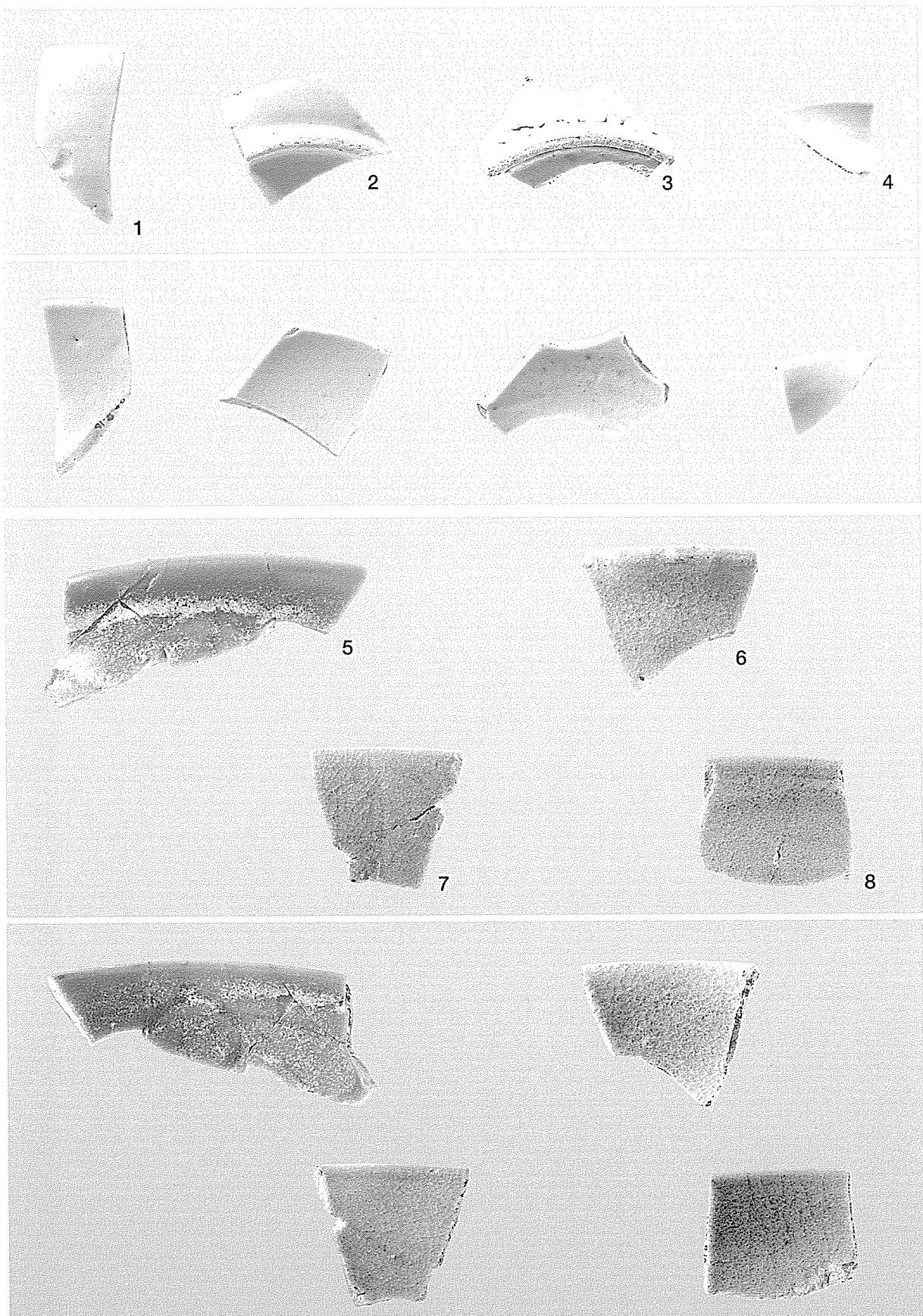


石敷遺構半裁状況

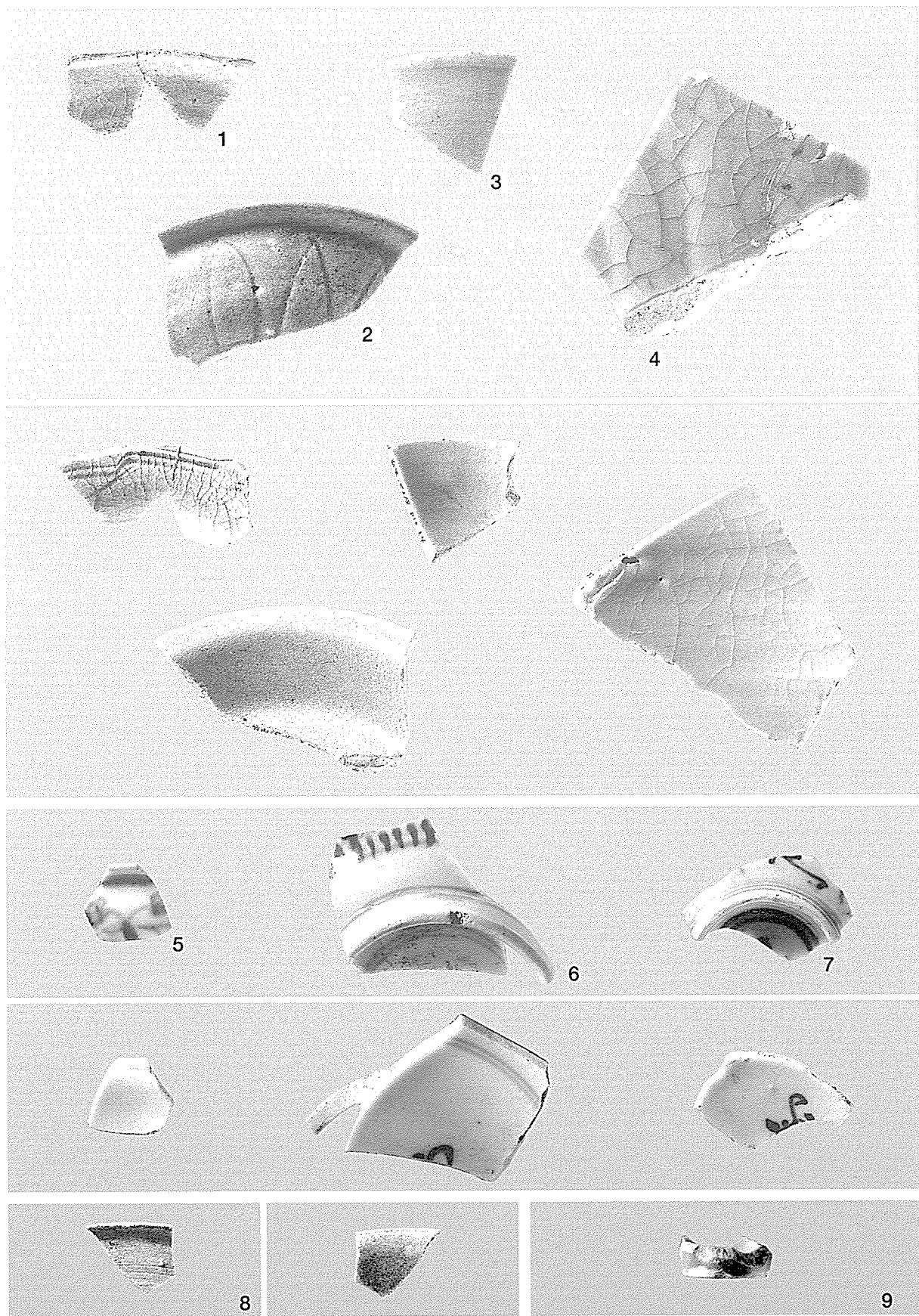


南地点の完掘状況

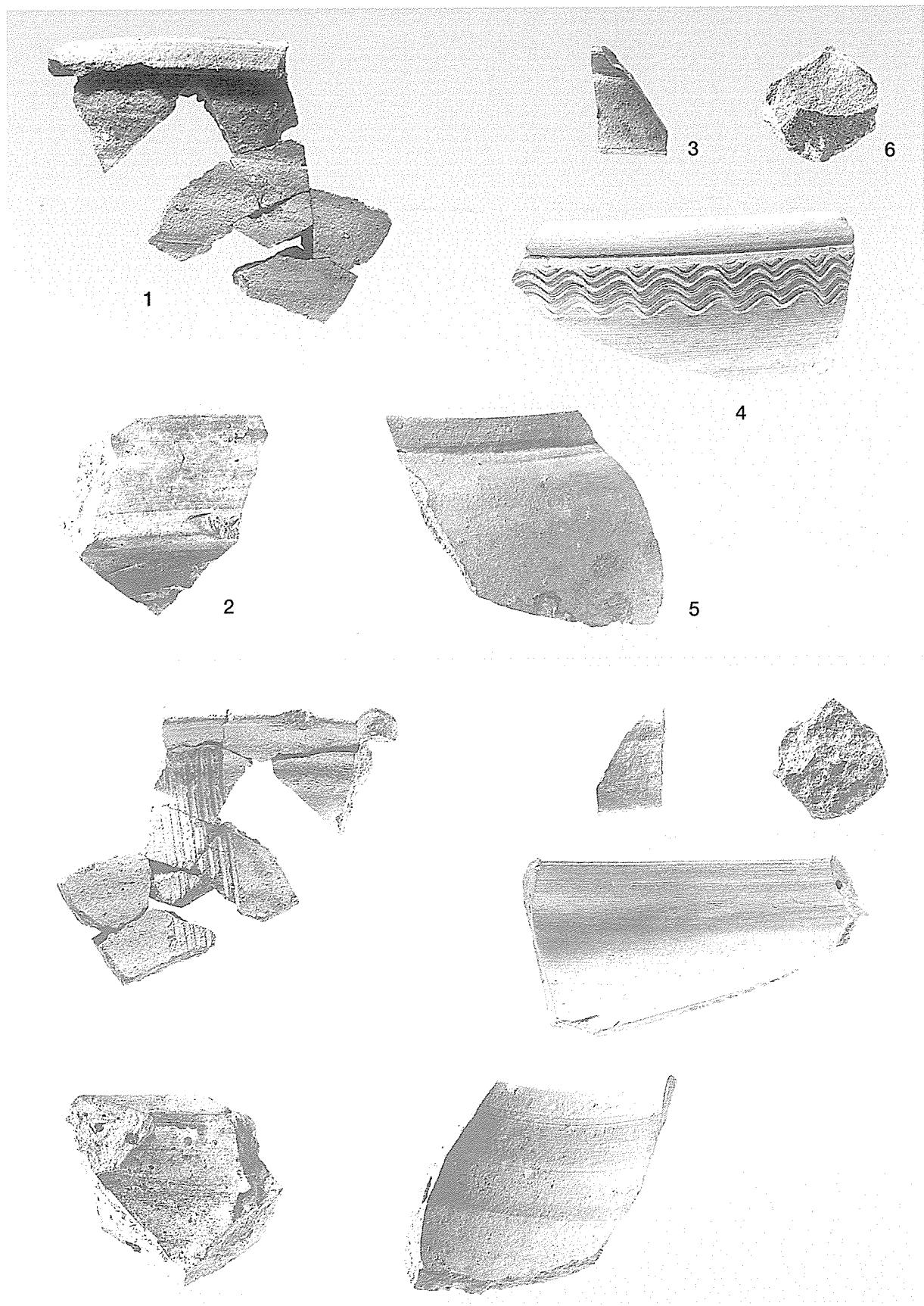
図版4



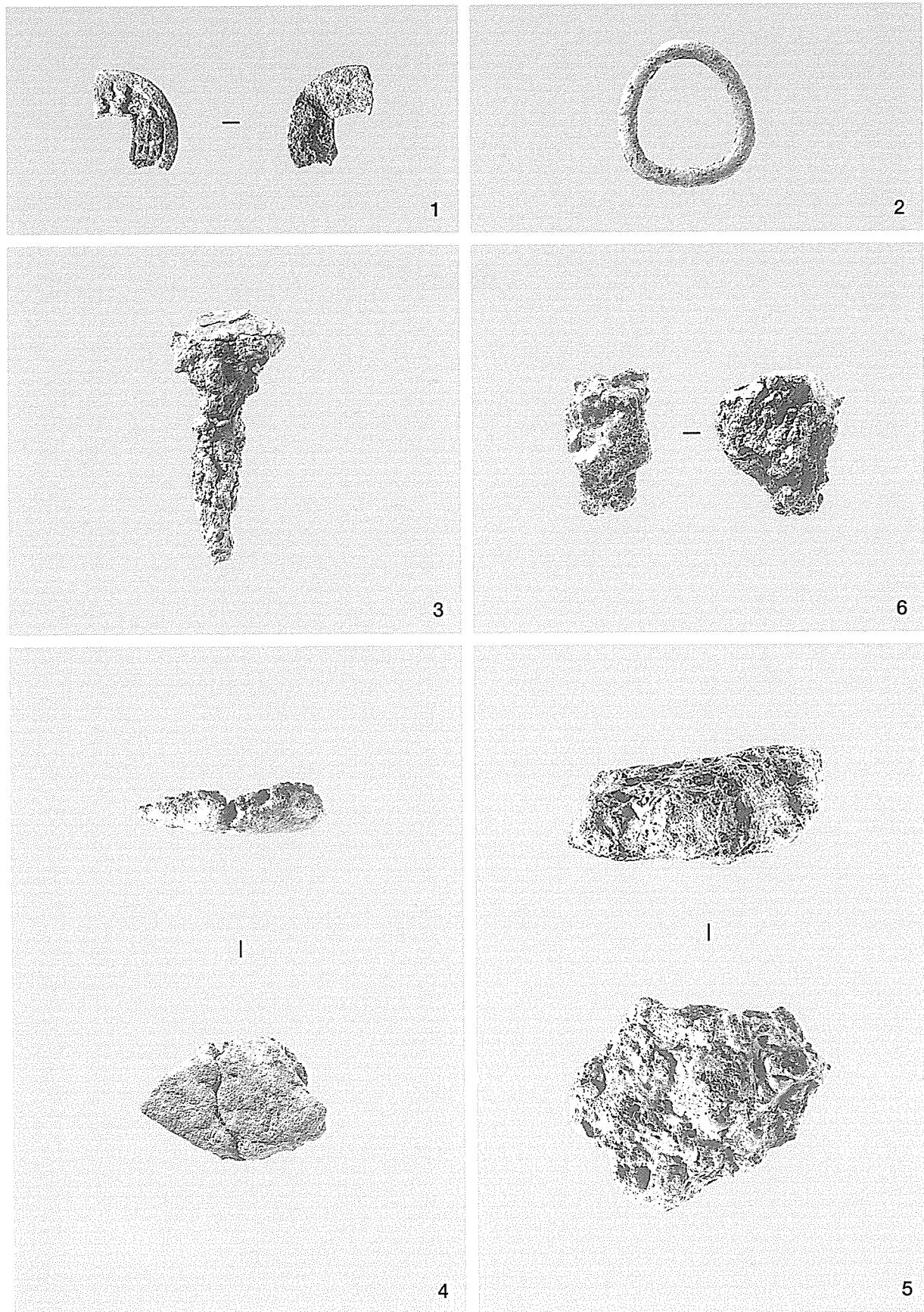
図版5 (第6図) 白磁:皿(1~3)・杯(4)、青磁:碗(5~8)



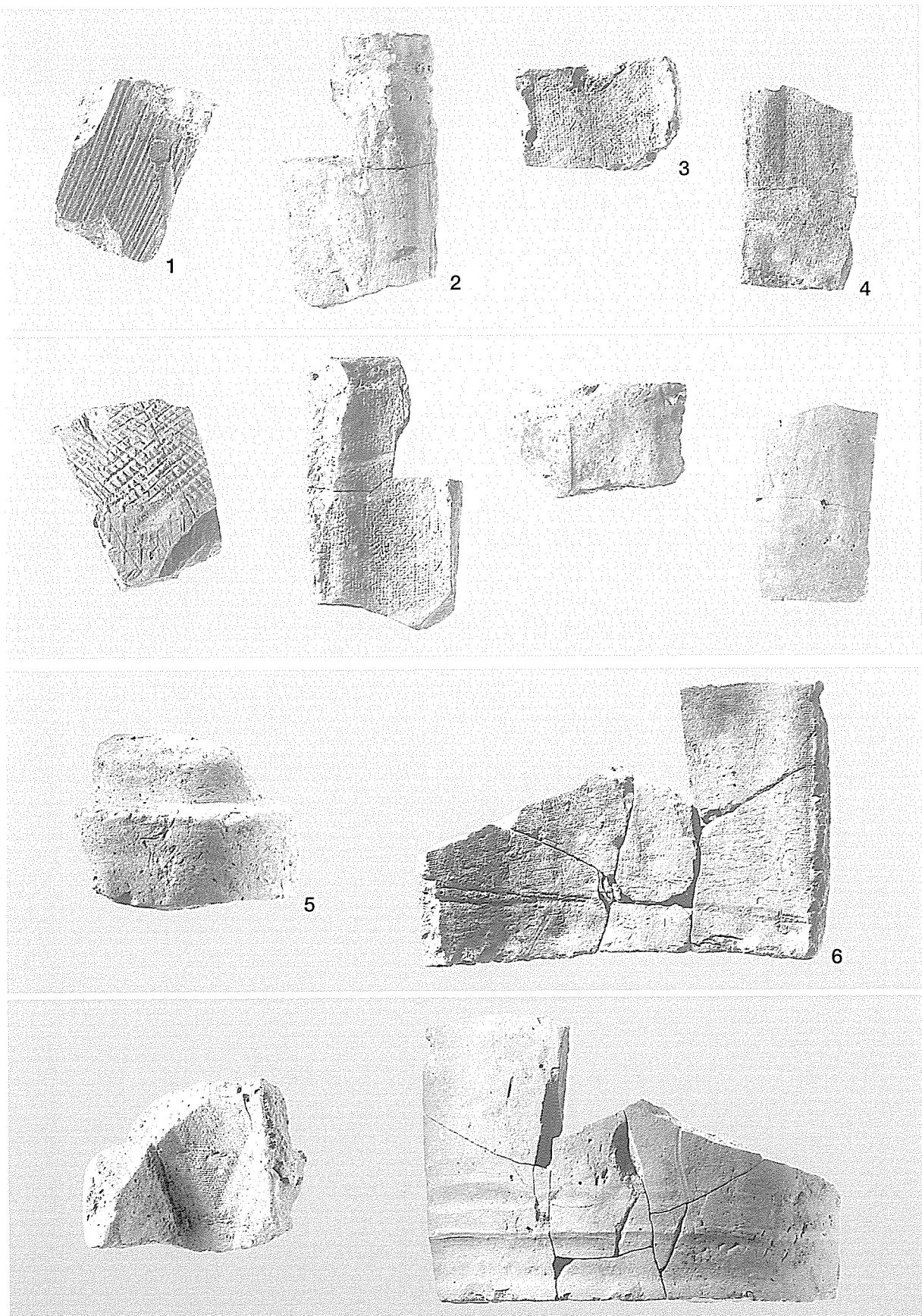
図版6 (第7図) 青磁:皿(1~3)・壺(4)、青花:皿(5)・碗(6・7)、翡翠釉:皿(8)、型物(不明):杯(9)



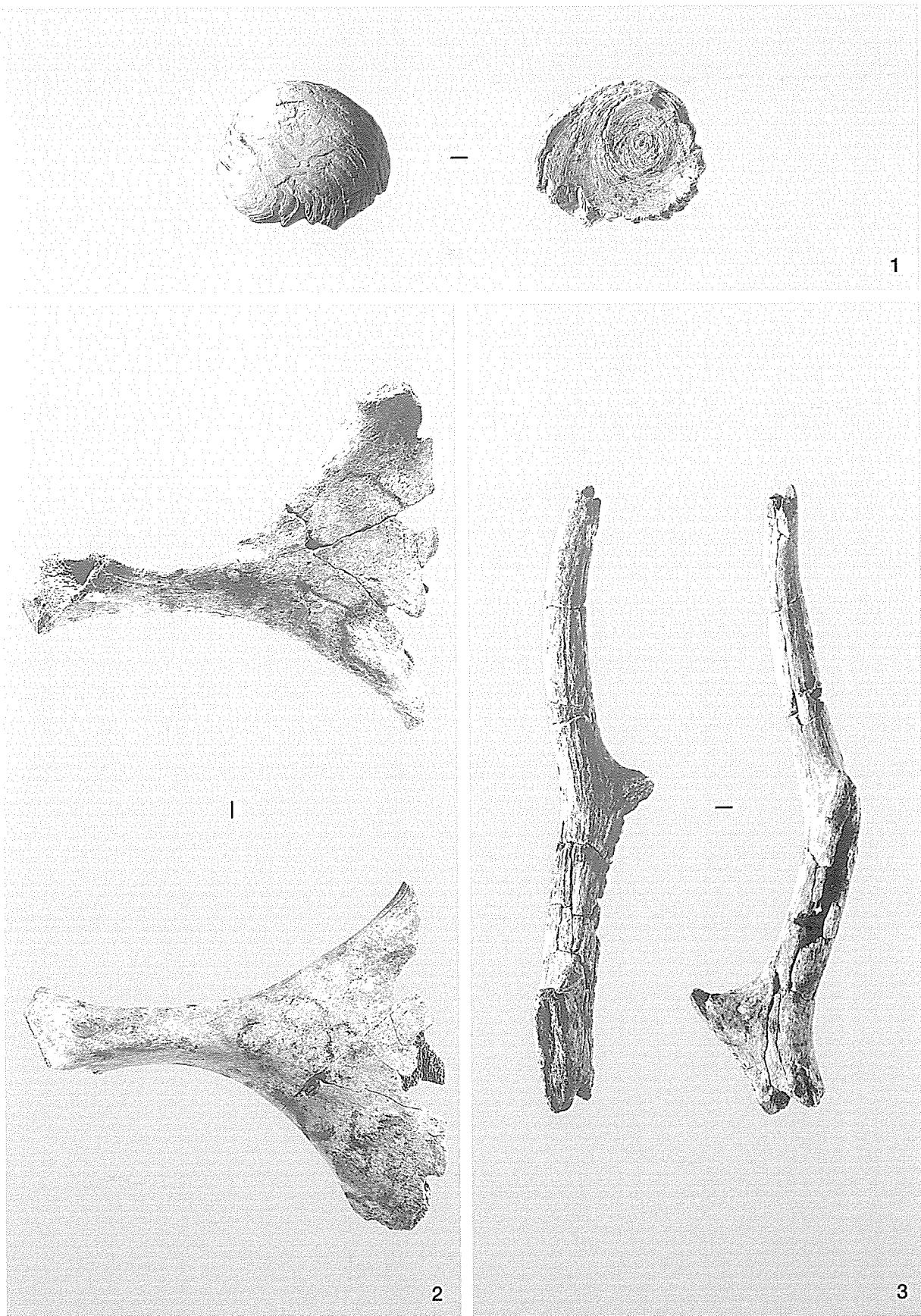
図版7（第8図）褐釉陶器：摺鉢（1）、備前陶器：摺鉢（2）、沖縄産陶器：壺（3・5）・水鉢（4）・円盤状製品（6）



図版8 (第9図) 錢貨(1)、青銅製品(2)、鉄釘(3)、鉄滓?(4~6)



図版9 (第10図) 高麗系瓦: 平瓦(1)、明朝系瓦(灰色): 丸瓦(2)・平瓦(3・4)  
明朝系瓦(赤色): 丸瓦(5)・平瓦(6)



図版10 (第11図) ヤコウガイの蓋(1)、ウマの寛骨(2)、シカの角(3)

---

那覇市文化財調査報告書第56集

## 首里旧山川村跡 (池城殿内地点)

—県道28号線道路工事に係る緊急発掘調査報告—

発 行 2002年11月29日

那覇市教育委員会

〒900-8553 沖縄県那覇市樋川2-8-8

編 集 那覇市教育委員会文化財課

TEL 098-853-5776

FAX 098-833-2202

印 刷 有限会社 福琉印刷

〒900-0012 沖縄県那覇市泊2-19-8

TEL 098-867-1989

---